2018年度学内研究助成 成果報告書

① 報告者所属・氏名

文学部美学美術史学科教授　仲町啓子

② 事業名

記録された「日本美術史」－田中一松・土居次義・相見香雨の調査ノートの研究と展示

③ 事業の目的

相見香雨（1874-1970）・田中一松（1895-1983）・土居次義（1906-1991）の三氏は、近代的な日本美術史研究の草創期に活躍し、明治末から昭和にかけての日本美術史研究に偉大な足跡を残した学者である。彼らは、膨大で緻密な調査ノートを残したことでも知られている。それらのノートには文字情報だけでなく、克明かつ秀逸なスケッチによる記録が見られ、その情報量は実に豊富であり、また有意義である。三者の研究対象は、専門が細分化してきた今日の美術史研究の現状とは異なり、古代から江戸時代までの広範囲に及んでいる。土居氏の調査ノートは京都工芸繊維大学に、田中氏のノートは東京国立文化財研究所に、相見氏のノートは九州大学に所蔵され、厳重な管理の下で保管されており、三氏の調査ノートの美術史的価値を伝えることを本事業の目的とした。相見氏研究については村角紀子氏（松江市歴史まちづくり部史料編纂課専門調査員）、田中氏については江村知子氏（東京文化財研究所文化財情報資料部文化財アーカイブズ研究室長）、土居氏および展覧会の総括については並木誠士氏（京都工芸繊維大学教授）、多田羅多起子氏（京都造形芸術大学）にご協力いただいた。

④ 事業実績・研究成果（具体的に）

京都工芸繊維大学美術工芸資料館・実践女子大学香雪記念資料館主催により、「記録された日本美術史－相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」を開催した（本学：平成30年5月12日～6月16日、京都工芸繊維大学：同年6月25日～8月11日）。美術史学会に後援申請を提出した成果もあり、本学では約1ヶ月間という短期間ながら、一般の方々、学内外の学生のほか、日本美術史、東洋美術史を中心とする研究者の方々に多く来館いただくことができた（入館者数：953名）。関連事業として、本学では会期中にギャラリートークを2回実施した。また、本学美学美術史学科の授業見学も多く行われた。本展は、香雪記念資料館が他大学のミュージアムと連携・開催を行った初めての例であるが、美術史を志す学生を指導する、大学（大学ミュージアム）という場で開催できたことは、非常に意義深いものといえるだろう。

⑤ 研究成果の発表・活用（学会発表・論文掲載・地域連携・産学連携など）

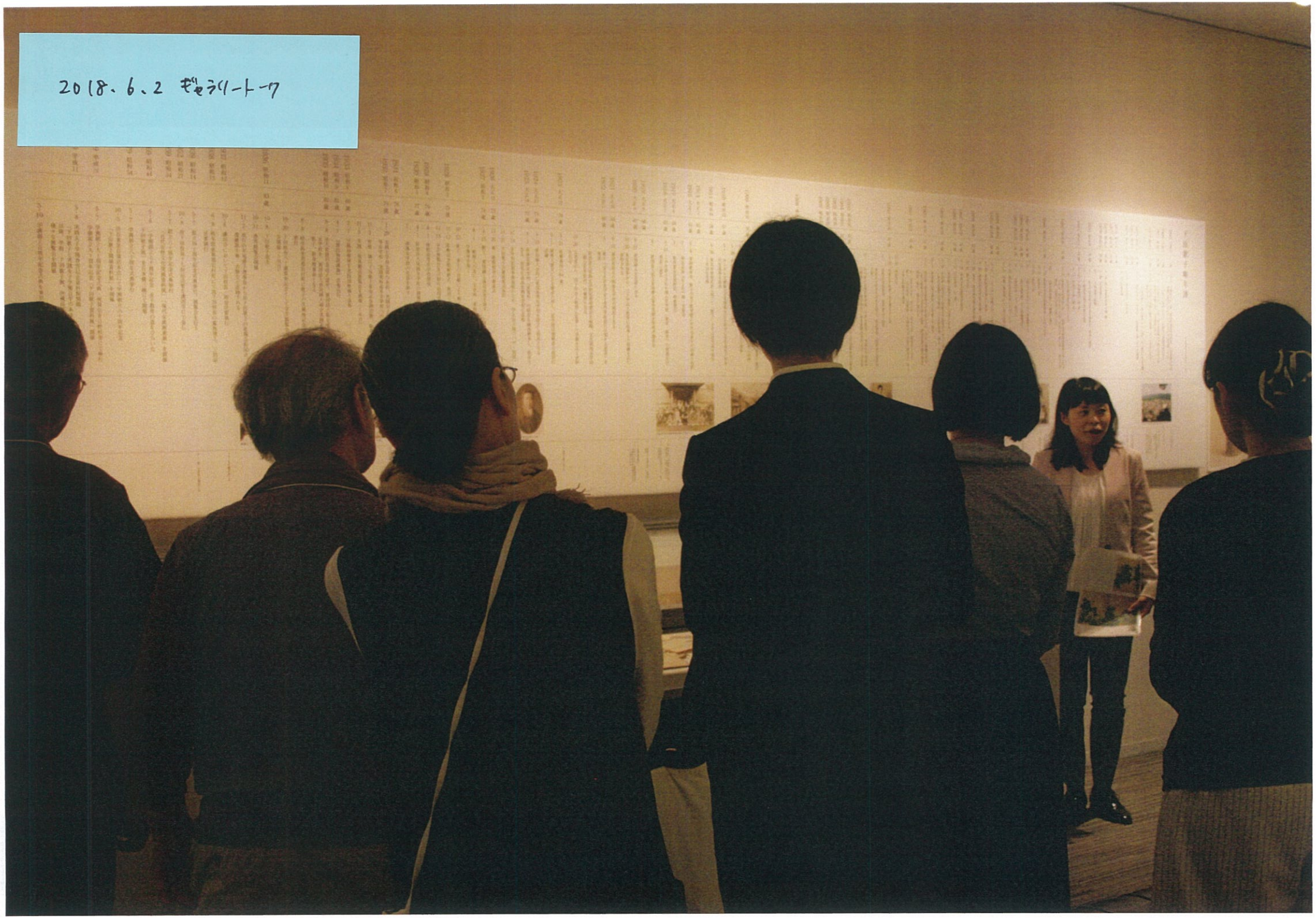
本展の協力者であり、土居ノートについて研究を重ねてこられた多田羅多起子氏が「幸野楳嶺『代毫記』（土居次義氏旧蔵）の美術史学的位置―美術史学のアーカイブ構築へ向けて―」を美術史学会全国大会にて発表された（於東北大学、2018年5月18日）。また、京都工芸繊維大学で行われたシンポジウムでは、申請者がパネルディスカッションに参加し、香雪記念資料館学芸員による報告も行われた（同年7月7日）。さらに、芸術の専門誌である『芸術新潮』2018年8月号等でも本展について取り上げていただいた。

⑥ 今後の展開・継続性について

三氏のうち、特に相見香雨のノートには、香雪記念資料館で作品を所蔵し、本展にも出品した谷幹々や奥田来禽等の女性画家に関する記述が残るため、今後も調査を継続したいと考えている。また、江村知子氏を代表とし、田中一松資料等を研究対象とする「日本美術の記録と評価についての研究－美術作品調書の保存活用」（科学研究費基盤研究(B)、2019 2021 年、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所）が採択された。本学および香雪記念資料館でも、適宜協力を行っていきたい。

2018.5.25
ギャラリートーク

2018.6.2 ギャラリートーク



展示風景